

2011 年 6 月 24 日

Howard Gardner 教授の夫人、Ellen Winner 教授の名著

The Point of Words: Children's Understanding of Metaphor and Irony (1988) の邦訳

『言葉の裏にかくれているもの』

子どもがメタファー・アイロニーに目覚めるとき

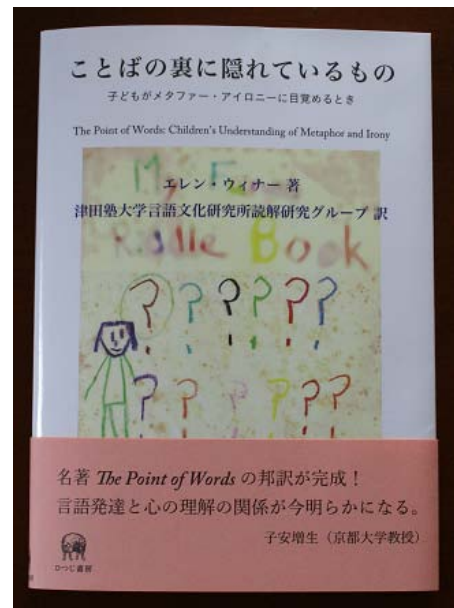
エレン・ウィナー 著

津田塾大学言語文化研究所読解研究グループ 訳

日本 MI 研究会 会長 上條雅雄

書名の中に「メタファー」という言葉を見つけた時から強く惹かれたのにはそれなりの理由がある。ここで本書を紹介することにしたのは次の背景があるからである。日本 MI 研究会 (JMIS) のサイトを読まれる多くの方は、Harvard 大学大学院 Project Zero の名著

“*Teaching for Understanding*” (Martha Stone Wiske, Ed. 1998) を既にご存じで、「理解におけるバイブル」として位置づけられているものと私は想像する。そして、この本の「第 6 章 理解の質とはなんでしょう」—において、理解というものをこのように大胆に体系づけ「理解の 4 軸 (観点)」から表現することに関心されたことと思う。この「理解の 4 軸」として、**Knowledge**(知識), **Method** (方法), **Purpose** (目的), **Form** (形式) が挙げられている。最後の「**Form** の軸」に「メタファー」が登場する。『人は理解したことをいかなる形式をもって表現するか』そこにはいろいろな形式のジャンルがある。その中の重要な一つのジャンルが『メタファーであり、アイロニー』である。本書は「理解の質」や「理解の形式」をさらに深く考える際に大いに参考になると思う。



この特定の分野を掘り下げて説いているのが、名著 *The Point of Words* 『言葉の裏にかくれているもの』である。本書をあえて、他の Project Zero の名著と関係づけて説明したくなったのは私自身がいつも Project Zero のフレームワークの間の繋がりを探し求めながら味わい、楽しんでいるからであり、**Knowledge Web** としての視点からも並べて紹介したいと思った。

今回の新著の中の随所に素晴らしいイラストが登場するが、一つ一つの面を見るたびに Ellen らしい選択眼を感じる。また Ellen との快適な会話の余韻が脳裏に今でも明確に

残っている点が彼女の素晴らしい性格を物語っていると思う。というのは2006年、Howard Gardner教授、Ellen Winner教授夫妻を招聘¹した折、歓談の席で、私はかねがね気になっていたことをつい言ってしまった。「ハーヴァード大学プロジェクトゼロのフレームワークを含む名著の数々をより多くの人の深い理解が得られるように、執筆に際してより多様なEntry Points(切り口)を使って欲しい。特に日本人にはイラストやダイアグラムを挿入することでその効果が一段と増すと思う。」これに対してEllenは「その提言は非常に重要だ」と即、賛同してくれた。夫人が「審美的エントリーポイント(Aesthetic Approach)」に関して理解度が非常に高い方であるという印象を私は強くした。

出版社である株式会社 ひつじ書房からご許可を頂いたので、ここに紹介させて頂くことにした。

<http://www.hituzi.co.jp/hituzibooks/ISBN978-4-89476-537-5.htm>

■エレン・ウィナー：ボストンカレッジ教授、同大学心理学科長、Harvard Project Zero 上級研究員、ハーヴァード大学・心理学博士（1978）

(110624MK)

¹日本 MI 研究会が企画招聘による『Howard Gardner 教授日本講演 2006』にて、Ellen Winner 教授に”Current Thinking about Extreme Gifts”というテーマで講演を依頼（日本 MI 研究会サイトにも紹介）。